

視聴覚教材源流「写し絵」考

永 柴 孝 堂

現在、視聴覚教育教材の立場から、重要な位置にあるものに、映画、スライド、紙芝居、ペープサート、広義の形態劇、絵話等がある。

これらの素因をなし、または密接な関係をもつものに、往昔、巷間に発生発達して、特異な経路をたどった「写し絵」のあることに、気づくのである。

「写し絵」についての解説の類も区々で、なかなか正確をつかむのが困難とみえるが、ひとまず、平凡社大百科の「写し絵」の項を引用してみよう。

（寸法その他は、尺貫法が用いられているので、とくにメートル法には換算せずにおく）

『写し絵。ガラスに描いた絵を、灯によりスクリーンに写して見せる装置。』

装置と方法の大要、次の如くである。寸法は標準を示す。

幻灯の器械にあたるものをフロと言ひ、四つまたは五つを、間口二間より二間半程の張板の上に、間隔をおいてのせ、前に美濃紙製のスクリーンを間口と同じ長さ、高さ二尺四寸のものを張る。

種板は天地一寸六分、左右八寸五分の枠で所々に、円または角の穴をあけ、絵を描いたガラスをはめる。八寸五分の長さならば、八枚のガラスがはまる。これに、同一人物の、立ち、しゃがみ、走り、転び、起上り等の姿を描き、

それをかわるがわる巧みにレンズに当てることにより、「活動写真」と同じ効果を示す。

両端のフロは、大凡芝居の両袖の如き書割を映し、中間のフロで人物を扱かう。

二つの人物を行違わせる時は、フロを左右におきかえ、あるいはフロを抱えて、スクリーンより遠ざけ、あるいは近づければ、それにしたがって姿は、大きくも小さくも、臍にも鮮明にも映る。

写し絵と影絵との違いは、フィルムかガラスか紙とのちがいであるが、昔から混同されていた。

写し絵は、ガラスの輸入より始められたとされているが、それより古いという伝説もある。

武江年表には、享和年中に都楽なる者が発明し、都楽は嘉永元年七十九歳まで存命したとある。

写し絵は興行化して寄席芸の一つとなり、東京付近では、近代は明治三十四年亡の初代玉川文蝶が名高い。

昭和五年に民俗芸術の会が、二代目文楽を後援して「写し絵」の会を開いた。

関東各地において広くおこなわれたが、今や廃亡せんとしている。

文蝶、文楽の系統の出し物は、四季の花物、式三番叟、福助の口上、独楽まわしの如きストーリーのないもの、また、怪談安積沼等の、写し絵師がフロを使いながら台詞をいう単純なものと別に、説教師の太夫、三味線の伴奏によって一挙一動が人形芝居の如く、浄瑠璃に合い三味線に合う精巧なものとあり、その曲目に一の谷の須磨の浦、三莊太夫の通し、小栗判官の通し、日高川、千両のぼり等がある。

大阪には「錦影絵」と称したものが行なわれ、近年は絶えたが昭和六年に上方郷土研究会の主催で、四代目富士川都正に囑して演じせしめた。

フロは八個使用した。当日の出し物は、式三番叟、愛染棒、紙屑屋、牡丹灯籠、しんねこ、崇徳院、中の島大花火等で、浄瑠璃ものはない。

錦影絵は、天保の頃、初代富士川都鳥が江戸から伝えたものという。

要するに、写し絵は幻灯の進化したもので、一種のトーカーである。

その機械的設備は単純幼稚であるが、これを使用する技術、即ち巧みなる話術につれての一進一退、浄瑠璃三味線に合わせての一挙一動の技術は、実に驚歎すべき芸術であるが、その結果、すぐれた技術家とすぐれた新作を得ることの困難な理由から、ついに時代に落伍するうきめを見るに至った。

尚、嘉永六年にロシア船が日本へ来た時、幕府の役人のために、ロシアの写し絵（幻灯？）を見せたことが、嘉永明治年間図に見え、古事精苑の楽舞部二巻に引用されている。』とある。

昭和二十五年十月十三日夜、日本橋小西六ホールにおいて「写し絵」の実演発表会が催された。

この会は、武蔵野市に居住されている郷土史家で「写し絵」の研究では第一人者といわれる小林源次郎氏の総指揮により、最後の演出名人の調布の玉川文楽師操作。八王子より馳せ参じた説教節薩摩小若太夫の伴奏といった本格的なもので、各界名士を加え二百名を越す盛会であった。

幸いにこの観客席に加わることができ、生れて初めて「写し絵」というものの雰囲気味わい、その芸術性の高さには、ただただ頭の下るおもいであった。

文楽太夫は、器械を操作する所を、他人に見られるのを非常に嫌ったのであるが、とくに私は許されて、そのフロアを使いこなすようすを親しく拝見することができた。

その神技に近いデリケートな動きには、呼吸する間をも忘れるほどであった。

すでに文楽太夫も故人になられ、最初で最後であった当夜の感激を今も忘れることはできない。

「写し絵」の器械の名称をフロといい、風呂という、浴場のような字を宛てている。

また写し出される画の、フィルム of 役をするガラス板（絵の描いてあるもの）を、「種板」（タネイタ）というっている。

この二つの事について、小林氏から新しい知識を得た。

フロは風呂である。

幻灯器に、浴場のような名は変である。

これは、写し絵を演出操作する時、一人で数台を使い（四、五台平均）、その人達が小さな映写室（部屋）に数人もおり（多い時は五、六名ほど）右往左往していると（光源は昔は種油を用いたが石油が到来してからはランプになった）その熱気はかなり高いもので、各員は体中に一ぱいの汗をかき、わけても額には玉と流れて、ちょうど蒸風呂へ入っているような工合だそうである。（これは文楽太夫没後、小林氏自らが体験されたとのことである）

そこで当時の、洒落っ気の多い江戸の芸人達が、この理に基づいて命名したものと考えられる。

まことに妙を得たものと感心する次第である。

「種板」は、これは手品の種からきている。ガラスの板（徳川期はギヤマン）へ、思い思いの絵を描き、それに彩色する。

これは並たいていの技術ではなかった。色も透明でなければならぬ上に、色調も千差万別で、映し出された効果の相違といったものもかなりの差があったようである（染料の工夫）。

それにもっと重大なのは、原画のカラクリであった。

現今の映画技術にも匹敵する（あるいはそれ以上）機構の数々は、驚嘆そのものである。

アジサイの花が徐かに咲き拡がっていく所。人物が水中に飛入ると、パッと水けむりが立つ所。

行灯から鬼火がでて、幽霊に変わり、ボォッと消えていく所、等々。

これが、何枚かのガラス板の重ね方や、いく通りにも描かれた「原画」の組合せによって、演出できるのである。ワイドスクリーンで総天然色のオールトーカー映画のムードと少しも変りはない。

したがって、これらの原画製作は秘中の秘とされた。

他法を盗用する向きもしばしばあらわれた。つまり、手品の「タネ」に相当する「秘法」であつたのである。「種板」という名の、いかに深刻であるかがよく理解できる次第である。

関西では「写し絵」のことを「錦影絵」という、とある。

今は故人の、曾我廼家五郎氏著『喜劇一代男』の中に、写し絵のことがあつたので、抜き書いてみよう。

『（前省）私の母親は、どちらかというとハデ好きで、自然芸事なども好きな方で、よく錦影絵などを見に連れていってくれました。

錦影絵というのも、今の方には説明なしではわかってもらえませんが、まず映画の先祖を幻灯としますと、その幻灯のもう一つ先祖ともいえるもので、木箱の先にレンズをはめた「風呂」というものがつまり映写機で、うすいガラスに特殊な絵具で人物などを描き、うすい桐の枠にはめこんだ「種板」がフィルムに当たります。

そのガラスは、二枚三枚位重ねて枠に仕込み、引き出しのような具合に横手から動かすことができ、それを動かすと人物の手足が動くように見える、仕掛になっていました。

つまり足なら足を、はじめのガラスには、四本描いてあり、二枚目のガラスには一部分スミが塗ってあって、それを左右に動かすと、四本の足の中二本づつがかくれますから、歩いているように見えるのです。

そして、舞台にはスクリーンを張り、そのうしろから、風呂に種板をさしこみ、豆ランプの光で写して見せるのですが、登場人物の数だけ種板と風呂がいり、それに一人づつ使い手がかかるわけですから、スクリーンの裏には、時には五、六人の使い手がいて、てんでに自分の持ち役のセリフをいうのでした。

そして時時、この仕掛を見せるため、スクリーンを半分おろして、使い手が顔を出すこともありました。

つまり、文楽の人形使いが、出使いをするようなものです。

演出、演技も芝居や浄瑠璃からとったものが多く、私はこの錦影絵のおかげで、早くからいろいろな芝居のスジを知る事ができました。

錦影絵の仕掛は、ことばで説明すると、このようにたいそう判りにくくなりますが、実物を見て頂ければ一目で諒解が得られます。

私も後年、この錦影絵の道具をそろえて、なつかしい思い出として愛蔵しておりましたが、戦災ですっかり灰にしまいました。

きけば、桂南天という大阪のはなし家が、この道具を持っていて、時時お座敷芸の余興に映写して見せているそうですから、何かの機会にお目にとまることもあろうかと存じます（後略）。』

右の、桂南天という人は、芸能界でも色物師といって、切紙細工とか手拭曲技とか諸芸をこなす老練だそうである。

大阪西成南神合町に居住され、昭和四十年現在七十五歳でも、尚も若者をしのぐ大元気で、求められて今春「錦影

絵」の発表会を催したとのことであった。

早稲田演劇博物館発行演劇百科大事典に、前記の小林源次郎氏が「写し絵」を説明されている。

『江戸時代に考案された幻灯劇。』

上絵師熊吉が享和元年（一八二二）江戸上野にエキマン鏡と称する見世物が掛ったのにヒントを得て、友人の蘭医高橋玄養の協力のもとに、レンズ、板ガラスなどの材料を入手して作ったもの。

木板製の幻灯器（風呂という）を作り、ガラス板に墨で画を描いて、彩色を施し、薄板の枠にはめ、それに動きを加え、光源には種油灯芯を使い（のち石油ランプを用いる）、縦四尺（0.6m）、横一間（3.6m）ほどの和紙を映写幕とし、下座声色を加え、同時に数台の風呂を操り、劇を演ずることに成功し、うつしえと名づけ、芸名を三笑亭都楽と名のって、享和三年春有料公開し世人をおどろかせた。

その後、明治（一八六―一九二）末年まで、寄席や座敷、涼み舟などで演じた。しかし映画の出現後衰亡した。

明治末期に、同じ演出を、紙に描き、竹ぐしに差し、風呂を用いず、見せた見世物があったが、これも「写し絵」といった。

東京近在のものは多く説教節により、長時間演ずる方法を考えた。

演目は、風景、端物、寸劇、段物とあり、通常番組は、四季の花物、三番叟、端物、段物の順である。

彩色には色温度が考案され、映写手法も現在の映画の手法の大部分をすでに利用していた。

名人も続出し、両川亭船遊、その子九世結城孫三郎、春日部の山本都山、八王子の玉川文蝶、調布の玉川文楽は最後の名人といわれ、その次男薫森亮は、完全なる諸道具一切と演技とを伝える東京方面の唯一の人であったが、

昭和三十四年に没した。

関西方面へは、天保年間富士川都正によって伝えられ、錦影絵と称し、明治末年まで見せており、大阪の御霊神社境内には「あやめ館」という専門の小屋まであった。

現在京都伏見に老年ながら歌川都司春が健在で、大阪の落語家桂南天とともに、ときおりその道具を使い実演を見せている。』

と、さすがに専門研究家だけあって、よくまとまっていると思う。

同事典中に「玉川文楽」のことが記されてあった。

『玉川文蝶系「写し絵」を独自で覚え、絵も自分で描いて操作した写し絵芸人。文久元年（一八六一）八月七日いまの調布市国領に生れた。本名薫森利三郎、まんじゅう屋が本業。説教節も語り、車人形も使った。八王子を中心として興行していた。昭和二年八月七日没。』

二代目文楽は初代の二男で、明治十八年（一八八五）生れ。薫森亮という。昭和にはいつ頃から興行はせず、釣道具を調布上布田で販売、車人形だけは使っていた。昭和三十四年一月十四日没。』

右のようであるが、終りの行の、一月十四日没は、何かの間違いではないかと思われる。

故文楽師と親交のあった小林氏によると、亡くなった日時は、一月十二日午前二時で、調布市布田天神社隣接地の大正寺に安らかに眠っておらるる由である。

日本百科大辞典の中で『写し絵は現今わずかに八王子辺に残されている』とあった。

計らずも、昭和四十年十一月二十日の朝日新聞紙上に、八王子市石川町に居住される元教員久米井亮江氏（64）が、十年以前より私財を投じて「車人形」と「影絵」の（これは写し絵にちがいない）資料館を自宅に作られた。という

記事を見た。(いつかその門をたたきたいと思っている)

しかし現在、完全な風呂と種板数種は、調布市の薫森家に保存されているのみである。

種板には横に絵がならんで描いてある(現代の映画フィルムの縦に絵が連なっているのと同様の)。たとえば第一画は人物の立っている図。第二画はその人が手を挙げている図。これを一、二。一、二と、交番に写すと、手をあげさげして体操しているように見える。この原理を、画用紙程度の厚紙に描いて、裏表両面とし、合せた中心へ竹のくしをはさんで貼合せ、団扇の形のような紙人形を作って演出するものが現われた。

写し絵を紙人形に工夫したヒントは、徳川期(年代不詳)すでに江戸市井芸能であった『影絵芝居』であると考えられる。

たとえば、福助などの形を厚紙で形どおりに切抜いて、中心にくしをつけ、もう一本のくしを動くようにならべておいて、人形の首や手を動くくしへ連絡しておけば、可動くしを上下にスライドさせると、この福助はおじぎをしたり、手まねぎしたりするわけである。この紙製人形をスクリーンに映せば、影絵劇が演出できるわけである。

武江年表巻七に『蔭絵の戯れ。昔は黒き紙を切り抜き、竹のくしを四つに割きて、矢羽の如くにさし、行灯に写して、玉藻の前の姿を九尾の狐に替らし、酒吞童子を鬼に替らすの類にてありしが(後略)』とあり、この蔭が影にかわったのではあるまいかと思われる。

「写し絵」と「影絵芝居」が俱に世にあった時は、光を基とした同系のものであるので、何かの形式でお互いに交流されて演出もなされたであろう、と考える。

「影絵芝居」の絵がぬけて「影芝居」と呼ばれ、これが「写し絵」の別名となり、ある時代からは「写し絵」とも

「影芝居」ともいうようになったのである。

江戸期の百科辞典守貞漫稿中に『蔭芝居』の項があり、両国の川開き（花火大会）に、このカゲシバイ船が興行しながらまわったとある。そういうえば寄席の唄として高座できかれる大津絵節に、この川開きの情景をうたった文句があり、屋形船その他いろいろな船の中に「影芝居船」のことがあった。

また故伊藤晴雨画伯の「江戸風俗画集」の中の川開きの所に、福助のあいさつが映写されている影芝居船の図を見ることがある。

前記芸人の「両川亭船遊」などという名前は、おそらく川開きの場での人気者であったかと思われる。

ウツシエが、幻灯から紙人形芝居に移る過程について、書き出そうとする矢先、幸いにして、東京練馬大泉に居住される、民俗学者であり、この紙人形の方のウツシエの研究家である、森田好学氏の『うつしえと三遊亭円朝』という快筆を発見することができたので、ここに森田氏に代弁して頂くことにしよう。

『元来「写し絵」という名で呼ばれているものには、二色あって、一つは享和時代に初代池田都楽がエキマン鏡を使って考案したといわれる、風呂を用いてビードロへ描かれた絵を、スクリーンに映じて見せるものと、明治中頃に、この写し絵と影絵からヒントを得て工夫されたもので、これは風呂を使わずに紙人形を用いて演ずるもので白昼でもおこなうことができる故、縁日やお祭の日に寺社の境内等で小さな小屋がけをしたり、後には辻辻で子ども達相手にアメなどを売っては、この人形（業者は人形を単に絵といった）を使って、風呂を用いて演じた写し絵のような、歌舞伎狂言や武勇伝、西遊記等の芝居を、ドラやタイコ、拍子木等の鳴物を入れて見せたものである。

然しこれに似た紙人形は、すでに文化文政頃に存在していたという説もあるが、勿論その頃には幻灯の写し絵が

盛んであったのであるから、そういうものの考案される可能性は多分にあるわけである。

けれども「うつし絵」または「影絵」といい盛におこなわれるようになったのは、明治中期に創始されてからのことである。

私はこれ等の二通りの写し絵を考える上において、便宜上前者には「写し絵」。後者には「うつし絵」の字を使うこととしている。

うつし絵は最初深川方面に始められ、その後次第に下町から山の手へ、また東京のみならず関西方面から九州あたりまで伝えられ、大正中期には東京においてその全盛期を呈したのである。

当時は、出し物も西遊記が一番人気を博しており、おもにこの狂言を演じた関係上うつし絵のひいき連も、うつしえといわずに「悟空八戒」などといった。

うつし絵も創始時代には、小さいながら小屋を張り、総檜造りの立派な舞台で演劇的風格を備えた演出をみせ、なかなかしつかりしたひいき連を持っており、彼等は正月や盆暮などには、自分の名前の入った引幕を競って染めてくれたものだそうである。

また如何にその風格があったかは、当時使用していた美事な絵を一見すれば、その一端がうかがえるのである。然しこれも大正の中期になって、次第に同業者がふえてきて、小屋ばかりでなく「流し」が盛になってからは観客も小さな子どもが主になってしまい、演出も現今の紙芝居と何等かわらぬ程度のもものとなってしまった。

しかして昭和に入ってから姿を現した「絵話」に押されて、昭和五、六年頃には、お祭りや縁日にうつし絵の小屋はめったに見られなくなり、全く紙芝居の天下になってしまった。

うつし絵が創始されたのが、大体日清戦争頃であり、現在では当時の関係者はほとんど死んでしまい、只一人明

治三十四年頃からこの「うつし絵」を始め、昭和十年頃までやっていた、大河内元三郎という老人が向島吾嬬町に住んでいたのみである。

日清役数年前の頃の事。当時噺家として有名な三遊亭円朝（内藤新宿北裏居住）のごく下端弟子に「新さん」という男がいた。

年齢は三十を出たばかり位で、細君と一緒に深川仲町に住んでいた。

二人とも、大阪弁であった。

彼等は芸事に大変趣味を持ち、とくに芝居道には中々精通していたという事である。

然しどうした事か新さんは高座に上ると客受けが悪く、始終客席からは『下りろ』の声がかかって、誰も彼の話をきいてくれるものがなかった。

新さんの出ていたのは、本所三ツ目通りの若宮亭であったが、そのようなわけで寄席へ出たのは、僅か一年たらずの間だという事である。

師匠の円朝にしてみれば、仮にも自分の弟子にしている者がそんな具合では、なんとか考えなければならぬと色色と思案していたが、ふと、円朝の頭に浮んだのは、新さんは役者の似顔絵がうまいということである。

新さんのこの特技を生かして、円朝は生活できるようにしたいと考えた末に思いついたのが、当時世間で人気を博していた「写し絵」の事である。

当時「写し絵」の道具にするものでも大変に高価なものであり、一般の子ども達にはとうてい手にする事が不可能であった。

悟道軒円玉老が子どもの頃（明治六、七年）に蔵前の都楽の店で買った「写し絵」の道具は、本玉の簞った風呂

と、絵が二枚ついて、一分（現価換算不詳）位とられたそうである。

そこで、せめて「写し絵」のマネゴトでもできるものと考えたのが「写し絵用切抜絵草紙」である。

まず、円朝は新さんに、忠臣蔵や岩見重太郎の武勇伝、または四谷怪談、西遊記等の下絵を描かせてみたところ、これが中中おもしろく子ども向きにできたので、それではこの下絵を絵草紙に刷り駄菓子屋などへおろして売り出してみると、彼に版木代や紙の費用を与え嘶家としての師弟関係を断ったのである。

新さんが円朝の教えによって作った最初の絵草紙は、ワラ半紙を二三十駒位に区切って、その中へ物語りに出てくるいろいろの人物の姿態や書割を描いたもので、色彩は安染料を用い、地色は黄色で絵の線だけ黒刷にし、その上へ赤色を重ねて種種の模様などを現した実にそまつなものであったそうである。

我々が子どもの時分に、買って切抜いてはダンゴのくしに貼つけて遊んだ「絵し絵絵草紙」は、人形や化物の周囲は黒刷になっていたが、当時は駄菓子屋などで安く売る絵草紙としては、墨代や版木代がかさむというのであまり墨を用いなかったそうである。

新さんはその絵草紙を持って駄菓子屋等へおろしにいった、絵草紙毎に一通りの説明をし、うつし絵をやる方法まで教えていたのである。

幸いなことにはこの絵草紙は次から次へと、ストーリーを変えたり続きを出版する度に、子ども達に非常な人気を博したのである。

時代は降って日清戦役頃、深川霊岸町に「ろくろ首」の小屋者で、元銚子の漁師をしていた丸山善太郎というビツコの男がおり、弟で松五郎というアバタの大男がいた。

この善太郎が、当時街中で子ども達にさわがれていた「うつし絵」の絵草紙に目をつけ、これで一仕事しようと

新さんとタイアップして二人でいろいろと工夫をこらし、始めたのが、縁日で演った小屋掛の「うつし絵」であった。

もちろん創始時代は縄張りなどもなく、単に本所深川一帯だけでやっていたのであり、出し物は新さんが噺家であった関係から、落語や講談、稗史種のものや、当時寄席の写し絵でやっていた多種多様のものが多く、次第に歌舞伎狂言を取入れたり、自作のものを使ったり、または世事を織込んだ狂言などを用いるようになった。

西遊記だけは、創始時代から人気があり、うつし絵全盛期その後も一番の出し物であった。

以上のような訳で『うつし絵』は生れたのである。』

趣味家らしいくだけた快適な説明で、結構なものと思っている。

現今の『紙芝居』という名称は、この「写し絵」または「うつし絵」の別名、『影芝居』から来ているものと信じている。

紙芝居とはまことに奇なる名にも感じる。

大正時代は紙人形が芝居をした『うつし絵』の全盛期であった。車のついた舞台をひいてきて町角にその場を作り、アメを売って、その劇を毎日連続物で観せた。当時少年であった私はそのよきファンであった。私の記憶では「うつし絵」とはいわず「影芝居」というていた。しかも東京の下町の方言で芝居をシバヤというので「カゲシバヤ」という印象であった。

幻灯の写し絵なら影芝居でもわかるが、紙人形の芝居にカゲはおかしい。これは紙芝居が本当ではないだろうか。などと悪童仲間とケンケンガクガク奇論珍説をたたかわせたことを覚えている。

大正十二年の関東大震災以後。東京市中にこのカゲシバ屋さんが急に数を増してきた。その頃から完全にカゲシバイという名ではなく『紙芝居』という科学的？な新語に改められていた。これは私の幼少時の乏しい記憶をたどつての事なので、これらの正しい裏付を目下研究中である。

昭和へ入ってからますます数を加えた紙芝居屋さんが、能率的理由から絵話式のものを取入れてやったので、この絵話式のものにも『紙芝居』という名がついてしまった。

そこで両者を区別するために、絵話を「平絵」。紙人形のことを「立絵」。の紙芝居というようになったのである。ある紙芝居研究図書の序に著者が『私が紙芝居に興味を持つようになったのは大正の末で、立絵の紙芝居がぼつぼつ出だした頃であった。(後略)』という条があったが、これは、亡びはじめたのミスプリントではないかと思われる。名著であるだけに残念で仕方がない。

平絵は紙芝居として、大きく教育面に取り入れられ、その評価をますます高めている。

立絵は、当時の諸事情からついに亡んで、その姿を消してしまった。

しかし、この立絵の形態や原理を改善し、正常化して、新しい紙人形劇に更生し、そのものは『ペープサート』と名づけられ、正しい児童文化財として認められるに至った。とりわけ保育教材としては不可欠なものとなった。

皇孫浩宮が学習院幼稚園において、ブタのペープサートを持って、あそんでおられる所がテレビ放送されたそうである。

昔時の「うつし絵」や「立絵」を知る者として、感慨無量のものがある。

今日視聴覚教材として確固たる位置にあるものの、その大原をたずねるとその多くは、凡そ非教育的な立場におかれていたもののようなであった。

しかしこれらの特性を発見し、改案し、正規な線上にのせて、これに広く活用の道を開いている我教育界の感覚に、ただただ敬意を表するのみである。